

環

(あい)

| | |
|---------------|----|
| 光耀抄 | 2 |
| 琥珀集 | 6 |
| 瑠璃集 | 15 |
| 瑪瑙集 | 27 |
| 紅玉集 | 30 |
| 俳誌交歓 | 31 |
| 1月号月評 | 32 |
| 恵贈句集拝見(70) | 34 |
| 恵贈俳誌拝見(36) | 36 |
| 特別作品「クロアチアの旅」 | 38 |
| 琥珀集作品鑑賞 | 40 |
| 瑠璃集作品鑑賞Ⅰ | 41 |
| 瑠璃集作品鑑賞Ⅱ | 42 |
| 瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 | 43 |
| 他誌転載 | 46 |
| 琵琶湖俳句サロン(3) | 47 |
| イザナミの言語学(1) | 48 |
| 須磨寺・現光寺吟行記 | 50 |
| ひこぼえ会通信(26) | 52 |
| エッセイ「残念羽織」 | 53 |

今月の一句

瞽女ら来て竹の手のべよ炭火鉢 桂樟蹊子

(昭和六十一年作)

若狭の大飯町には水上勉の「若狭一滴文庫」がある。展示されている一滴文庫の人形館には、竹で作った様々の人形が展示されている。なかに目を惹くのが、雪の舞台に導かれてゆく四・五人の女の人、それは目の見えない三味と唄で門付の渡世をしていた「連れ瞽女」の人形の姿であった。「連れ瞽女や竹偶みな雪の虚空向き」も同じ時に作られた一句であるが、これらは樟蹊子の並々ならぬ瞽女への哀愁の情感が溢れ、胸をうたれた作品である。

隆子

恋の鹿

塩路隆子

道化師へ黄落しきり午後の街
雁が音の突如乱る陣屋跡
アインシュタイン学研都市の刈田守る
夕さりも夜さりも鳴きて恋の鹿
時折の世辞に育ちて榎櫃の実
孫太郎の生薬売りや柿たわわ
白秋も雨情も唄ひしぐるる日

一月号光耀抄

塩路 隆子選

天空へ聳ゆる城址冷まじき
竹伐りて茶笥の里の星増やす
わらわらと雀逃げ発つ刈田かな
万葉園ハーブの香る落葉籠
神の旅人力通る粟田口
稲架はもう鷺の遊び場風が吹く
草津より曳売りの荷や大冬瓜
稲架干に夕日輝く大糸線
門前の小店にセコム神の留守
落柿舎に旅の蓑笠木の実落つ
茶どころや茶の花咲ける宇治の橋
秋しぐれ出羽三山を隠しける
朴落葉地につくまでの宙返り
冬日和良きご縁得て自彊術
宝塔へ野の風集め酔芙蓉
禅寺へ至る小径や彼岸花
石庭の枯山水や石露の照り
鬼の郷山燃ゆるかに爐紅葉

伊東 和子
阪本 哲弘
国包 澄子
笠井 清佑
宮田 香
佐用 圭子
竹内 悦子
増田 一代
和田 郁子
石川 かおり
山口 キミコ
坂根 宏子
塩路 五郎
鷺見 たえ子
中井 登喜子
難波 篤直
西田 史郎
橋本 靖子

九条ねぎの研究発表参観日
 箔ひかる襖貼る手に力込め
 静寂のなんじゃもんじゃや昼の虫
 藁塚とひとつとなりてかくれんぼ
 中天に掲げ満月翳りなく
 帰り来てほっと一息露しぐれ
 秋深し吾が家をとこの匂ひなき
 出雲社の大き注連縄冬日差
 人柄を思はず大き諸もらふ
 秋茶寮葛餡なじむ粥の味
 寺屋根の寒山拾得そぞろ寒
 五十鈴川ゆるゆる落葉載せてゆく
 捨てきれぬボタンいくつか冬支度
 漕艇の水脈にむらがる都鳥
 柿たわわ旅情いや増す宿場道
 紅葉して又兵衛桜崖つぷち
 秋の旅出湯ランプの薄明り
 竜胆や「平家」を語る尼の声
 塚ひとつ刑場跡の蔦紅葉
 明日香路の稲に古代の風の音

秦 和子
 福本 すみ子
 藤本 秀機
 松岡 和子
 三川 美代子
 宮越 久子
 宮崎 左智子
 山崎 里美
 山本 孝夫
 横田 矩子
 飯田 美千子
 伊藤 和子
 伊藤 憲子
 落合 晃
 桂 敦子
 川崎 利子
 木戸 宏子
 北尾 章郎
 黒住 康晴
 中井 弘一

卵割る寒の卵を食べるため
 爽やかな破顔一笑久しぶり
 子と孫の満ち足り見ゆる良夜かな
 石路の黄の明るき城下人優し
 賤ヶ岳のふもと明るし大根干
 閉門は日没刻や城もみぢ
 小春日や喉をすぎゆくミルクテイ
 古民家の木蠟明り古酒の酔
 野菊晴紅さし直す地蔵尊
 繋留のヨット舳ふや秋の風
 寄り添うて犬の体温颯風裡
 寝ねかてに月夜の底に身を沈め
 夜長人紅茶に垂らすブランデー
 方言の優しさ聞きつ流れ星
 ポシエットの鍵をまさぐる短き日
 立冬の地球を離れ宇宙船
 鬣に草の実つけて駒肥ゆる
 ひと刻を紅葉の風や無隣庵
 佗助のひと枝花器に句会かな
 漏刻の静かなりけり猛り鴟

常田 創
 十時 和子
 谷口 俊郎
 伊藤 純子
 坂上 香菜
 鈴木 照子
 森下 康子
 片岡久美子
 粟倉 昌子
 井口 淳子
 小澤 菜美
 西郷 慶子
 藤見佳楠子
 笹井 康夫
 杉本 綾
 高谷 栄一
 田中 浅子
 辻 香秀
 辻 知代子
 中川すみ子

閑けさに里のせせらぎ芋水車
 清澄の香り放てる松手入
 二年半ぶりの大漁初秋刀魚
 手向山神のまにまに七五三
 鳥さへも訪うてくれぬ日秋刀魚焼く
 瓢箪を誇る暖簾や秋の風
 ぼつぼつと思ひ出話冬林檎
 水琴の癒しの小径秋の寺
 三日月の金星を追ふ冬始め
 郁子熟れて近江の山の幸豊か
 リハビリの歩幅伸びける朝爽か
 コスモスや大和三山動かざり
 独り身へ味噌汁ギフト冬の朝
 達者ですか聞く虫の音の際立ちて
 秋の色踏みて寡黙や木の根道
 風化せる五百羅漢や草紅葉
 袴穿く犬の貫禄七五三
 里山の水澄む川瀬音微か
 水龍に守らるる葎柿紅葉
 着ぶくれを乗せて蘆の間水路舟

中村ふく子
 中本 吉信
 西垣 順子
 西村 敏子
 能勢 栄子
 松田 和子
 松田 洋子
 森田 利和
 山崎 真義
 山田 愛子
 山本 丈夫
 吉田 宏之
 渡部 法子
 和田森早苗
 稲田 和子
 伊庭 玲子
 大越 義雄
 大島みよし
 小西 和子
 小林 久子

琥珀集

十三夜

阪本哲弘

里の子の一目散や秋祭
ままごとの団栗拾ふあるじかな
竹伐りて茶筌の里の星増やす
強かや微醺を襲ふ蚊の名残
手すさびの盃はいびつや十三夜
どぶろくに夜の白みたるメディア論
身に入むや古地図に赤き被爆域

竹田城址

伊東和子

神の山

国包 澄子

秋高く虎臥城址指呼にして
岩磴を螺旋に露の大手門
露の世の城塞高き穴太積
幾世経し本丸跡の露しとど
天空へ聳ゆる城址冷まじき
盛衰の歴史埋めて山の霧
但馬へと越ゆる狭山や秋時雨

日を拾ひ木の実を拾ひ神の山
わらわらと雀逃げ発つ刈田かな
渺々と銀波輝く芒原
栗飯の二合に季節あふれける
角切りを逃げきりて鹿息荒し
組伏せて仕来り通り角を切る
今やうや紙一枚の赤い羽根

落葉籠

笠井 清佑

唐辛子

佐用 圭子

門前の無人販売神の留守

真新し杉玉軒に神無月

神の留守社殿清める緋の袴

挑戦といふが信条今朝の冬

万葉園ハーブの香る落葉籠

落葉踏む正倉院へ急ぐ人

奥山の石仏山を眠らせる

乾きたる男の厨肌寒き

仄かなる妣のおしろい月の夜

爽やかやルンバ縦横無尽なる(ルンバは自走式掃除機)

大栗を生で食ふ児や山育ち

唐辛子隅に生きをり真つ赤つか

ねむりゐる嬰の足裏やもみぢ晴

稲架はもう鷺の遊び場風が吹く

敗 荷

宮田

香

大冬瓜

竹内 悦子

敗荷やマラソンランナー風起こし

舶来の化粧水買ふ冬仕度

そぞろ寒変換ミスの多き夜

ハンゲルの文字馴染めぬ夜の長き

神の旅人力通る粟田口

新婚の騎手念願の菊花賞

ハロウインの渦巻の飴とろけ出す

茶の花や番茶焙する老舗の香

朝寒やビル解体の音響き

石たたき湖畔のカフェの玻璃隔て

草津より曳売りの荷や大冬瓜

秋惜しむ百円市の大津町

神の留守会釈で過ぐる宮の前

朝寒や嬰の為ならば粥を炊き

秋の上高地

稲架干に夕日輝く大糸線
野に山に秋大いなる上高地
秋深き明神岳に神の住む
遠近に収穫前のそば畑
没日射す農家の庭の木守柿
行く秋や静かな野路に白き月
新そばをかうて信濃の旅土産

神の留守

おもむろに吐息をひとつ秋の暮
大菊の整列閱兵こちかな
門前の小店にセコム神の留守
紅葉のひと葉燦めく蜘蛛の囿に
ひと言の言葉の重み秋深き
押花に紅葉美人を選びけり
のんびりと鳥遊ばせて照紅葉

増田 一代

嵯峨野

鳥啼きて釣瓶落しの奥嵯峨野
敗荷の片寄る水面影の濃き
池の面に映る黄葉のゆらぎかな
落柿舎に旅の蓑笠木の実落つ
茅葺きの庵に馴染む吊し柿
木洩れ日の作る日向や帰り花
吹き寄せの紅葉の色を数へけり

和田 郁子

茶 祭

宇治川に祭主の祝詞爽やかに
三の間に茶祭神事秋の川
澄める水汲み上げ茶事をつるべかな
茶どころや茶の花咲かせ宇治の橋
三の間に結界の注連口切日
口切の茶事巖かに興聖寺
宇治川の中洲の茶席秋晴れて

石川かおり

山口キミコ

出羽三山

坂根 宏子

冬うらら

鷺見たえ子

小春日に「きらきらうえつ」なる列車（酒田から鶴岡）

白鳥の落穂啄む車窓かな

酒田駅おでん蒟蒻振舞はれ

櫻黄葉山居倉庫に降りかかる

秋しぐれ出羽三山を隠しける

秋深し凜と立ちたる五重塔

宿坊の雪吊り既に完了す

菊日和

塩路 五郎

飛鳥路

中井登喜子

採血の血管逃ぐる今朝の冷

夕陽中煙めき群るる赤蜻蛉

かはらけを乗せる風あり秋高き

露天湯に身をまかせをり冬紅葉

朴落葉地に着くまでの宙返り

想ひ出のグレンミラーや冬うらら

やり直し効かぬ人生菊日和

朝日受け撓ふ柿の実おいしさう

冬の朝老舗けやきの大看板

冬日和良きご縁得て自彊術

冬曇かやぶき門のそびえたち

冬うらら優しく笑まふ弥勒仏

ジェンダーの公開講座小春の日

冬の夜の「銀座の雀」深夜便

歓喜揺るる音楽堂や星月夜（円山野外音楽堂）

秋夕べあの日の歌のアンコール

からすうりひと盛り売られ無人店（飛鳥五句）

晴着著て人になりたき案山子かな

飛鳥野に浮き沈みせるあきつかな

宝塔へ野の風集め酔芙蓉

天高し今なほまろぶ石舞台

没日刻

難波 篤直

金木屋古き寺院の垣として

禅寺へ至る小径や彼岸花

ゆるキヤラに集まる子供秋フェスタ

秋風に吹かれ数ふる鷺の数

飛行雲目立つ秋空没日刻

肅々と水運ぶ列天高き

秋晴やオーブンキャンパス賑へり

七五三

西田 史郎

恙なく句会に参加着ぶくれて

着ぶくれて人の目無視の齡かな

酉の市の帰り浅草「今半」へ

お茶室の庭に広がる花八つ手

石庭の枯山水や石路の照り

京町屋坪庭隅の石路の花

神前に祝ふ孫なし七五三

けらつつき

橋本 靖子

獣道やも自在に続く芒原

落暉待ち芒野にわくシャッター音

ノックして森目覚めさすけらつつき

朝露に光る穂芒銀の鈴

豊作の田圃朝より糶煙

フィルターをかけたる山河冬の霧

鬼の郷山燃ゆるかに櫨紅葉

秋風情

秦 和子

しとやかな祇園をどりや秋風情

来賓の席落ち着かず運動会

九条ねぎの研究発表參觀日

たづぬれば冬の安居や尼の寺

「冠雪」とメールで届く世界遺産

借景の紅葉トンネル雨霽に

休耕田果なく続くふじばかま

瑠璃集

いわし雲

中井 弘一

明日香路の稲に古代の風の音
戯れて萩の葉かげに憩ふ蝶
鴉鳴く案山子の思ひ知りつくし
一日の仕事を終へて秋刀魚食ふ
いわし雲昭和の歌を口遊み

大原路

北尾 章郎

寒月

常田 創

竜胆や「平家」を語る尼の声
碑一つの庵の跡や露むぐら
紫蘇の実の香り仄かや大原路
〔敗荷の風情あまたの上野かな
柿を挽ぐ慣ひの絶えて故郷遠し
（不忍池）〕

凹凸を呑み音を呑み霧の朝
寒月や革靴の音跳ね返し
卵割る寒の卵を食べるため
舞姫を読み終へてより懐手
新妻が湯豆腐好きを持って余す

葛紅葉

黒住 康晴

プレ喜寿の祝 in 関西

十時和子

音立てて落つる木の実を身ほとりに
猿の待つむかご実りて連なれる
樹林帯抜けて広がる草もみぢ
〔比叡より離宮の庭に降るもみぢ
塚ひとつ刑場跡の葛紅葉〕

迷走の台風一過同期会
爽やかな破顔一笑久しぶり
プレ喜寿の足元軽し秋うらら
旧友と酒交はす夜や秋の宴
船宿の贅ふんだんに松茸煮

一月号月評

塩路 隆子

天空へ聳ゆる城址冷まじき

伊東 和子

兵庫県朝来にある竹田城は、全国でもまれに完存する遺構であり、天守台は標高357、7メートルにある山城遺跡として、最近特に有名になり観光客も多いと聞く。これぞまさに「天空へ聳ゆる城」である。作者の行かれたときは秋の最中。その素晴らしい季節の感覚として、すぐさま「冷まじき」と言う言葉となつて口から出たに違いない。その他季節を変えて雲海に聳える城址、また深い霧に包まれた城址などはまさに幻想の城跡として、人気を博しているのであろう。

竹伐りて茶笥の郷の星増やす

阪本 哲弘

作者、筆者ともに生駒の北部に住まいがある。かれこれ三十五年になる。更に北部に茶笥を作っている高山地区がある。最近茶笥竹も中国産が出回っているようであるが、矢張り竹叢の多い里である。「竹伐る」のは九月から十月にかけての時期を「選ぶ」と竹のために良いとされている。茶笥の里もその通り、竹を切ると美しい星の季

節「星月夜」「銀河」「星流れ」等が視界の広がった高山の空に広がり、満足そうに眺めている作者の姿が浮かんでくる句である。うまく纏められた。

わらわらと雀逃げ発つ刈田かな

国包 澄子

何と言つても「わらわら」の擬態語である。知つておりながらも、なかなか思い出せない言葉である。広辞苑を開くと「散り乱れるさま」「ばらばら」と解説してある。刈田を逃げ発つ雀のさまをうまく表現された。「ばらばら」との表現では余りにも味気ない。「わらわら」そのもの、良い措辞を見つけたとまず感心をした句である。

万葉園ハーブの香る落葉籠

笠井 清佑

作者は奈良にお住まいで奈良の行事や展覧物には詳しい。筆者も春日神社へお参りをしたあと万葉園へ立ち寄ることが多いが、万葉集に出てくる植物を季節ごとに鑑賞できる格好の場所である。いつも園を守る人達がお世話をしているが、その傍らには落葉を集めた籠がある。その籠からは、そこはかとなくほのかなハーブが香っていたと言う。よく訪れている人なればこそそのチャンスに恵まれた句と言えよう。さて秋のハーブといえば・・・。(以下略)